

令和7年度 自己点検・評価について

自己点検・評価の視点	自己点検・評価体制における意見・結果・改善に向けた取組等
学内からの視点	
プログラムの履修・修得状況	<p>「データサイエンス教育プログラム」は、令和5年度から全学生に対して開始しているが、令和6年度の実績で履修率74.6%、令和7年度の実績では80.6%を達成している（大学全体の収容定員の学生が、データサイエンス教育プログラムの授業を1科目以上履修している率）。また、前年までに実施していた同様の科目の履修人数と比較して、希望者が最大で213%に増加。</p> <p>本プログラムは、卒業までに修了条件を満たした学生に対して、修了証を発行する仕組みとなっているため、必修及び選択科目を1科目でも履修している学生数を「履修者数」とみなすと、順調に履修を進めている状況と判断できる。また、令和4年度以前に入学した学生に対しては、本プログラムの内6科目について、前年までの同様のシラバス内容の授業履修の読み替えを承認している。また、令和5～7年度の修了要件を満たした学生数は、計42名である。</p>
学修成果	<p>令和7年度のデータサイエンス教育プログラムの学生履修者への授業アンケートの結果を分析すると、必須科目の「情報リテラシー」の平均満足度が81.3%、本プログラムの春学期の全科目の平均満足度が81.6%となっている。特に、このデータサイエンス教育プログラムのために新設した必須科目の「データサイエンス・AI基礎」の授業の満足度は83.6%と高い満足度をあげている。</p> <p>また、同アンケートの結果によると、「この科目分野をさらに深く学びたくなりましたか?」という設問に対して、春学期の全科目の平均で、4.13（5段階評価）となっており、さらにデータサイエンス・AIを学びたいという意欲をもっている。「この授業で新しい知識やものの考え方を得ることができましたか?」という設問に対しては、同平均で、4.54(5段階評価)で、新しい知識を得ることができたという学修成果があげられる。</p>
学生アンケート等を通じた学生の内容の理解度	<p>令和7年度の授業アンケートの結果を分析すると、良好な学修効果が得られている。</p> <p>特に、「データサイエンス・AI基礎」の授業においては、「この科目分野をさらに深く学びたくなりましたか?」という質問に対して、93.6%がさらに学びたいと回答している。履修した学生からは、「AIが進歩してる今、この授業を履修することができて非常にためになりました。論理的に話すことが求められている現在、データを用いることは説得力を向上させることにもつながり、今後の分析次第で成長過程を考えることができるのではないかと思います。様々な場面でデータを分析していきたいです」などといった感想があげられ、前向きにデータサイエンス・AIの必要性の理解が得られている。</p>
学生アンケート等を通じた後輩等他の学生への推奨度	<p>令和7年度の授業アンケートの結果を分析すると、良好な後輩等への推奨効果が得られている。</p> <p>学生からは、「とっても楽しい授業で毎回の授業が楽しみでした！AIとの向き合い方、現代社会におけるAI、データ分析の重要性などを学ぶことができました。」「とても面白い授業だった。講義形式ではなくアクティブラーニングだったのが受けていて楽しかった。また来期も受講したいと強く思える授業だった」「AIを利用したり、データを比較し分析したりなど自分が今までにやってこなかったことをできたので、履修して良かったです。データを見て、分析する力はこれから確実に必要だと思うので、授業が終わっても、様々な視点を持って、今まで習ったことを活かしていきたいと思います。後輩にもこの履修を薦めたいと思います」などといった感想があげられている。</p>
全学的な履修者数、履修率向上に向けた計画の達成・進捗状況	<p>本学の「データサイエンス教育プログラム」が、文部科学省の「MDASHリテラシーレベル」の認定を受けたことを、学内への周知をはじめ、東京大学で開催された「数理・データサイエンス・AIコンソーシアム」でのポスター発表などを通じて、学外にも周知を拡げた。また、「データサイエンス・AIが、今後の学生生活だけでなく、将来の社会での活動において、いかに重要な学びであるか」を、学生に理解していただくよう、担当教員と履修した学生のメッセージを、全学年向けの履修ガイダンスによる周知を実施した。さらに、本プログラム関連の特別授業及びプロジェクトについても、ポスター、パンフレット等による周知を継続的に行った。</p>

自己点検・評価の視点	自己点検・評価体制における意見・結果・改善に向けた取組等
学外からの視点	
教育プログラム修了者の進路、活躍状況、企業等の評価	令和7年度に本プログラムを修了した4年生の進路は、「大手ICT・システム企業」「大手サービス企業」「大手航空企業」「自治体」等となっている。また、職種としては、「企画職」「SE・プログラマー職」「営業・販売職」「人事・事務職」等である。
産業界からの視点を含めた教育プログラム内容・手法等への意見	令和7年度には、3件の特別授業を開催した。①IT企業とのコラボレーションにより「データを読み取るUX/UIデザイン・ワークショップ」を実施。②デジタル広告会社とのコラボレーションにより「データを活用したデジタルマーケティング・ワークショップ」を実施。③自治体とエンターテインメント企業とのコラボレーションにより「AIと地域活性化やエンターテインメントの未来を展望するトークショー」を実施した。これらの企業からは、データサイエンス・AIの基礎的知識を学ぶこととともに、そのデータ分析やAIの活用により、新しい価値をつくる人材を育ててほしいとの要望が引き続きあった。また、数年先のデータサイエンス・AIによる社会への影響について、多角度からの視点や示唆もあり、データサイエンス・AIのスキルを活用し、社会に新しい価値をつくる学びに応じるために、本学では、産学官連携によるPBLのプロジェクト等も実施していく。
数理・データサイエンス・AIを「学ぶ楽しさ」「学ぶことの意義」を理解させること	データサイエンス・AIが身近なところですでに活用されている事例の調査を授業の課題とすることで、データサイエンス・AIを学ぶことの楽しさを知るきっかけをつくりだしている。また、データサイエンス・AIがビジネスモデルの創出をはじめとした社会への影響を考えるために、文部科学省及び経済産業省の「数理・データサイエンス・AIコンソーシアム」が主催したマッチングイベントで出会った企業とのコラボレーションにより、本学の環境教育センター主催による「SDGsコミュニケーション企画の産学プロジェクト」として、AIでお菓子の企画を考えるワークショップを実施し、このプロジェクトにはのべ248名の学生が参加し、AIを利活用した企画を考え、その企画コンテストを開催した。また、その成果として、優秀賞に選ばれた企画の試作品を制作し、学園祭にて約400名に対してその成果発表を行った。このPBL型のプロジェクトにより、より実践的な学びの機会をつくり、さらに来年度以降も、PBL型の授業を継続をして実施していく。
<p>内容・水準を維持・向上しつつ、より「分かりやすい」授業とすること</p> <p>※社会の変化や生成AI等の技術の発展を踏まえて教育内容を継続的に見直すなど、より教育効果の高まる授業内容・方法とするための取組や仕組みについても該当があれば記載</p>	<p>担当教員が異なっても授業水準が維持できるよう、主要科目においては、教材とツールの標準化を進めている。特に、生成AIを利活用した演習などは、今後、さらなる進化が考えられるため、基礎的知識については標準化を図り、同時に、応用的スキルについては、ハンズオン教材を体系的にライブラリー化して、学生が柔軟に選択し利活用できる環境も整備していく。</p>